

2018年（平成30年） 7月6日（金曜日）

毎週（金）14:00発行

発行所 （一財）日本エネルギー経済研究所  
石油情報センター電話（03）3534-7411（代）  
FAX（03）3534-7422〒104-8581 東京都中央区勝どき1-13-1イヌビル・カドキ11階  
ホームページ <http://oil-info.ieej.or.jp>

## ■ 概況

6/21~6/27のNYMEX・WTIは、65.54~72.76ドルの範囲で推移した。

6月28日は、先日来のEIAの米国原油在庫の大量取り崩し、イラン原油の輸入禁止要請、カナダ・リビア・ベネズエラからの供給懸念等、需給の引き締めり感を反映して、3日続伸し3年7か月ぶりの高値を更新した。8月限の終値は前日比0.69ドル高の73.45ドルだった。

週末29日は、先日来の需給逼迫感の高まりに加え、ベーカーヒューズ社発表の米国内石油掘削リグ稼働数が858基（前週比4基減）と2週連続で減少し、4日続伸、74ドル台に上昇した。8月限の終値は前日比0.70ドル高の74.15ドルだった。

週明け2日は、ホワイトハウスが、30日トランプ大統領はサルマン・サウジ国王と電話会談し、市場安定の重要性、必要があればサウジが増産することで一致したと発表、サウジ、ロシア等が5月から増産したとの報道もあり、5営業日ぶりに反落した。ただ、カナダのオイルサンド生産施設の停電等で原油先物の受渡点であるクッシングの原油在庫が取り崩されたとの報道、リビア・ベネズエラ等からの供給懸念も根強く、相場を下支えした。8月限の終値は前日比0.21ドル安の73.94ドルだった。

3日は、先日来の需給逼迫懸念に加え、5日発表予定のEIA週報で米国原油在庫の取り崩しが予想されることから、反発した。ただ、同日サウジアラビア閣議が市場安定のため必要があれば余剰生産能力を活用すると確認したこと、また、トランプ大統領が戦略石油備蓄（SPR）の放出を検討中とのうわさが出たことから、上値は抑えられた。8月限の終値は

前日比0.20ドル高の74.14ドルとなった。

4日は、米国独立記念日につき休場。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場（8月渡し）は、前週71.30~74.60ドルの範囲で推移した。6月28日75.30ドル、28日75.40ドル、7月2日75.50ドル、3日75.00ドル、4日75.00ドルで推移した。

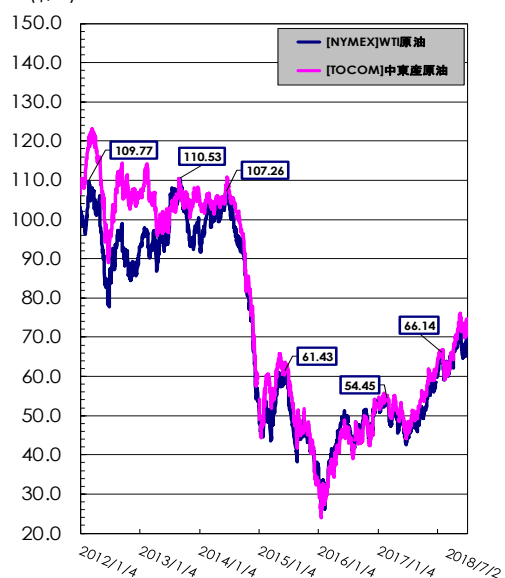
為替は、前週109.57~110.43円の範囲で推移した。6月28日110.05円、29日110.54円、7月2日110.87円、3日110.94円、4日110.37円で推移した。

主要元売会社の7月第2週に適用する卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社2.0円の値上げとなった。原油価格は大きく値上がりし、為替レートはほぼ横ばいで、原油調達コストは大きく値上がりした。

そのような中で、7月2日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.1円の値下がり、軽油は同横ばい、灯油も同横ばい（18%ベース）だった。ガソリンは2週連続の値下がり、灯油は2週連続の横ばいだった（18%ベース）。この週（7月第1週）の原油コストは値下がりし、元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに0.5~1.0円に値下げとなった。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	6/24 ~ 6/30	2,818 ▲ 57	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	72.0 ▲ 1.5	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	6/30	12,681 ▼ -139	▼ -
価格	中東産原油 (TOCOM) (\$/bbl)	7/2	74.82 ▲ 4.40	▲ 26.7
	WTI原油 (NYMEX) (\$/bbl)	7/2	73.94 ▲ 5.86	▲ 26.9
	原油CIF単価 (\$/bbl)	6月上旬	74.33 ▲ 2.89	▲ 22.20
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	51,493 ▲ 2,206	▲ 15,135
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	110.12 ▼ -0.44	▲ 0.76
	外国為替TTSレート (¥/\$)	7/2	111.87 ▼ -1.18	▲ 1.35

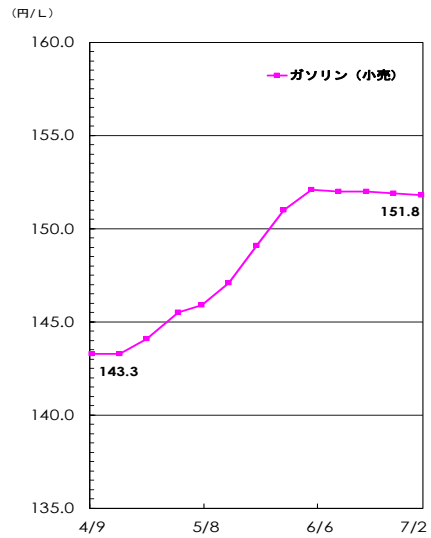
(\$/b)



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	6/24 ~ 6/30	862 ▼ -22	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	863 ▼ -63	▼ -	
	輸出	"	66 ▲ 40	▼ -	
	在庫	6/30	1,607 ▼ -68	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	6/26 ~ 7/2	67.2 ▼ -0.2	▲ 17.9	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	6/26 ~ 7/2	64.7 ▲ 2.3	▲ 16.7
		(TOCOM/中部)	7/2	66.0 ▲ 3.0	▲ 17.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/2	151.8 ▼ -0.1	▲ 21.5	

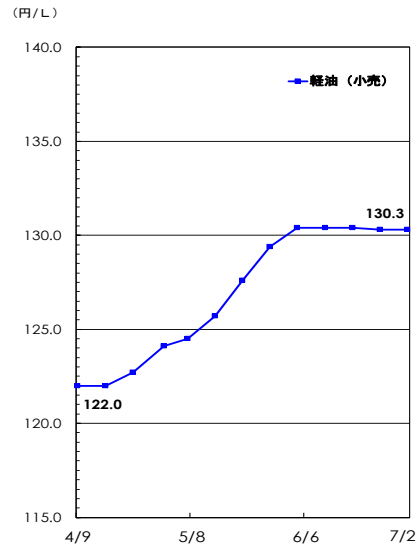
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

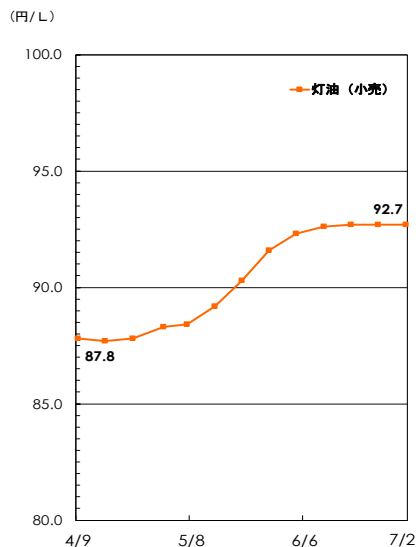
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	6/24 ~ 6/30	660 ▼ -65	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	592 ▼ -26	▼ -	
	輸出	"	147 ▼ -27	▲ -	
	在庫	6/30	1,416 ▼ -78	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	6/26 ~ 7/2	68.4 ▼ -0.3	▲ 21.0	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	6/26 ~ 7/2	67.7 ▲ 0.4	▲ 19.7
		(TOCOM/中部)	7/2	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/2	130.3 ➡ 0.0	▲ 20.6	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	6/24 ~ 6/30	103 ▲ 24	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	85 ▼ -14	▼ -	
	輸出	"	0 ➡ 0	➡ -	
	在庫	6/30	1,540 ▲ 19	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	6/26 ~ 7/2	67.5 ▼ -0.2	▲ 21.1	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	6/26 ~ 7/2	68.1 ▲ 2.3	▲ 22.3
		(TOCOM/中部)	7/2	68.2 ▲ 2.2	▲ 21.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/2	92.7 ➡ 0.0	▲ 16.5	



■ 関連情報

1 海外/原油

7月3日のNYMEX市場WTI原油は、米国のイラン石油の全面輸入停止要請やカナダのオイルサンド生産施設の出荷停止、リビア・ベネズエラ等からの供給不安など、需給逼迫懸念に加え、5日発表予定の米国エネルギー情報局(EIA)の在庫週報で、国内原油在庫が前週比330万バレル減と取り崩しが予想されることから、反発した。朝方、75ドルの大口をつけたものの、同日サウジアラビア閣議が市場安定のため必要があれば余剰生産能力を活用すると確認したこと、また、トランプ大統領が戦略石油備蓄(SPR)の放出を検討中とのうわさが出たこと、独立記念日の休日を前にポジション調整の売りもあったことから、上値は抑えられた。

8月限の終値は前日比0.20ドル高の74.14ドル、9月限の終値は前日比0.03ドル安の71.59ドルだった。8月限と9月限の値動きの違い、価格差の広がりが目される。

EIAによると、7月2日時点のガソリンの小売価格は、前週比1.1セント値上がりの1ガロン2.844ドル(83.9円/ℓ)となった。ディーゼルは前週比2.0セント値上がりの3.236ドル(95.5円/ℓ)。ガソリンは5週ぶりの値上がり、ディーゼルも5週ぶりの値上がり。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、平成30年6月24日～6月30日に休止したトッパー能力は70.8万バレル/日で、前週に対して18.1万バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。

原油処理量は281.8万klと、前週に比べ5.7万kl増加。前年に対しては46.7万klの減少。トッパー稼働率は72.0%と前週に対して1.5ポイントの増加、前年に対しては11.9ポイントの減少となった。

生産は前週に比べて灯油、C重油が増産となり、その他の油種で減産となった。

ガソリン/2.5%減、ジェット/15.0%減、灯油/31.0%増、軽油/8.9%減、A重油/7.0%減、C重油/23.2%増。今週のC重油の輸入は1.5万kl(前週比1.6万kl減)。軽油の輸出は14.7万kl(前週比2.7万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は、前週比ではジェット、A重油、C重油が増加となり、その他の油種で減少となった。前年比ではA重油、C重油が増加となり、その他の油種で減少となった。

ガソリンの出荷は86.3万kl(対前週6.7%減)と前週比で2週振りまで減少となり、14週連続で100万klを下

回った。

ジェット8.4万kl(対前週31.3%増)、灯油8.5万kl(対前週14.9%減)、軽油59.2万kl(対前週4.3%減)、A重油19.6万kl(対前週8.4%増)、C重油25.7万kl(対前週22.9%増)。

(単位:千KL)

	今週 (6/24 ~ 6/30)	前週 (6/17 ~ 6/23)	前週比
ガソリン	863	926	▼ -63 (-7%)
ジェット燃料	84	64	▲ 20 (31%)
灯油	85	99	▼ -14 (-14%)
軽油	592	618	▼ -26 (-4%)
A重油	196	181	▲ 15 (8%)
C重油	257	209	▲ 48 (23%)
合計	2,077	2,097	▼ -20 (-1%)

※今週出荷量=(前週末在庫+今週生産+今週輸入)-(今週輸出+今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

6月30日時点の在庫は、灯油で積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対しては、全ての油種で取り崩しとなった。

ガソリンは160.7万kl、前週差6.8万kl減。前年に対しては21.4万kl少ない。

灯油は154.0万kl、前週差1.9万kl増。前年に対しては1.2万kl少ない。

軽油は141.6万kl、前週差7.8万kl減。前年に対しては9.0万kl少ない。

A重油は74.3万kl、前週差1.0万kl減。前年に対しては3.9万kl少ない。

C重油は202.7万kl、前週差10.5万kl減。前年に対しては7.0万kl少ない。

(単位:千KL)

	今週 (6/30)	前週 (6/23)	前週比
ガソリン	1,607	1,675	▼ -68 (-4%)
ジェット燃料	946	947	▼ -1 (-0%)
灯油	1,540	1,521	▲ 19 (1%)
軽油	1,416	1,494	▼ -78 (-5%)
A重油	743	753	▼ -10 (-1%)
C重油	2,027	2,132	▼ -105 (-5%)
合計	8,279	8,522	▼ -243 (-2.9%)

### 3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

6月26日から7月2日の原油価格は前週対比で大きく値上がりし、為替レートはほぼ横ばいで、原油コストは大きく値上がりしたと見られる。

陸上スポット価格は、6月26日から7月2日までの間、ガソリン120～121円台でわずかに値下がり後戻して、軽油68円台でわずかに値下がり後戻して、灯油67円台でわずかに値下がりご戻して推移した。

海上スポット価格は、同期間でガソリン123～125円台で

大きく値上がり、軽油70円台で横ばい、灯油67～69円台で大きく値上がりして推移した。

先物価格は、同期間で、ガソリン116～119円台で大きく値上がり、軽油67～68円台で横ばい後大きく値上がり、灯油66～69円台で大きく値上がりして推移した。元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社2.0円の値上げとなった。

### 3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

製品スポット市況は、各油種の陸上取引はわずかに値下がりしたものの、海上と先物の全取引は大きく値上がりした。

7月第2週(7月5日～7月11日)適用の元売卸価格に影響を与える直近の陸上スポット価格(6月26日～7月2日千葉、川崎、中京、阪神の4地区の陸上ラック価格平均値)は、ガソリンは0.2円の値下がり、灯油は0.2円の値下がり、軽油は0.3円の値下がりだった。東京湾渡しの海上スポット平均価格は、ガソリンが1.3円の値上がり、灯油は1.8円の値上がり、軽油は1.7円の値上がりだった。先物価格は、ガソリンが2.3円の値上がり、灯油は2.3円の値上がり、軽油は0.4円の値上がりだった。原油価格は値上がりし、為替はほぼ横ばいで、原油コストは値上がりした。

7月第2週の大手元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社2.0円の値上げとなった。なお、元売会社は、2010年から卸価格の改定に際して、原油や製品相場社仕切りなどの動向を総合的に判断する方式としたが、2014年6月から、原油調達コストをより重視する方式に変更した。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー4地区平均]	今週 (6/26～7/2)	前週 (6/19～6/25)	前週比
レギュラー	67.2	67.4	▼ -0.2
灯油	67.5	67.7	▼ -0.2
軽油	68.4	68.7	▼ -0.3

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値][平均]	今週 (6/26～7/2)	前週 (6/19～6/25)	前週比
レギュラー	64.7	62.4	▲ 2.3
灯油	68.1	65.8	▲ 2.3
軽油	67.7	67.3	▲ 0.4

※上記価格は税抜き価格

参考値 (6/26～7/2実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -0.2	▲ 2.3	▲ 1.1
灯油	▼ -0.2	▲ 2.3	▲ 1.0
軽油	▼ -0.3	▲ 0.4	▲ 0.1
A重油	▼ -0.2		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上/バージ渡し平均価格

### 4 国内/製品小売価格

7月2日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.1円安の151.8円、軽油は同横ばいの130.3円、灯油も同横ばいの92.7円(18ℓベースでも横ばいの1,668円)だった。ガソリンは2週連続の値下がり、6週連続150円を上回った。灯油は2週連続の横ばいだった。都道府県別に、ガソリンの値上がりは18都道府県、横ばい7府県、値下がり22県だった。横ばいは、京都府ほか6県だった。全国最安値は徳島県の144.6円(同横ばい)、次が埼玉県の147.6円(同0.4円安)、最高値は長崎県の160.8円(同0.1円高)だった。最も値上がりしたのは、0.9円高の沖縄県(157.8円)、最も値下がりしたのは、0.8円安の山口県(150.7円)だった。

先週の原油コストは値下がりし、元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、0.5～1.0円の値下げとなった。今週の原油価格は大きく値上がりし、為替レートはほぼ横ばいで、原油コストは大きく値上がりした。次週(7月9日)のガソリンの小売価格は値上がりか予想される。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (7/2)	前週 (6/25)	前週比	直近高値
レギュラー	151.8	151.9	▼ -0.1	08/8/4 185.1
灯油	92.7	92.7	→ 0.0	08/8/11 132.1
軽油	130.3	130.3	→ 0.0	08/8/4 167.4

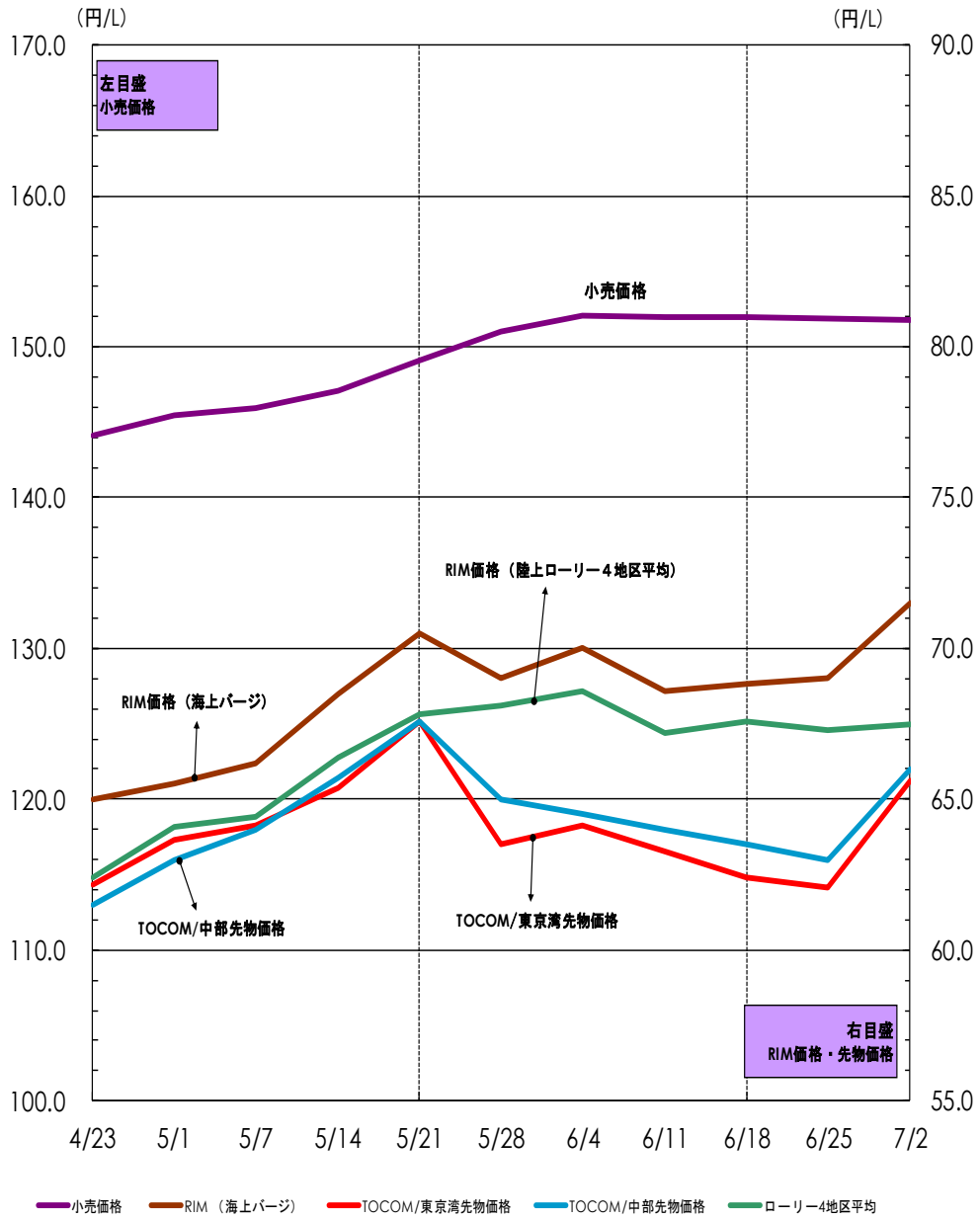
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

# ガソリン価格推移

(2018/4/23 ~ 2018/7/2)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格  
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

## ■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<http://oil-info.iecej.or.jp>) にも掲載しています。  
次回(2018第14号)の公表は、7/13(金)14:00です。

「セルフSS出店状況」(平成29年9月末現在)は、12月13日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

### 本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターへドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

### 「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

### 本レポート掲載データの出所について

#### ①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

#### ②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

#### ③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

#### ④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の東京、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用。

#### ⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

#### ⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における現金一般価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。